

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.26 No.6 June 2025

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University



6

CONTENTS

・巻頭言

不安や不満の処し方

／井上 昭洋 1

・文脈で読む「身上さとし」(19)

明治 22 年 8 月

／深谷 耕治 2

・英語文献にみる天理教 (10)

D.C. グリーンの『Tenrikyō』(6)

／尾上 貴行 3

・音のちから—中国古代の人と音楽 (26)

文物が語る音の世界—月琴と阮咸—

／中 純子 4

・ブラジルの宗教的風景 (6)

アメリカ南部人移民の植民地経験③

／中西 光一 5

・ニューヨーク通信 (24)

ニューヨークの桜

／福井 陽一 6

・おやさと研究所ニュース 7

2024 年度おやさと研究所 特別講座
「教学と現代」「『天理教台湾伝道史』
刊行記念 台湾伝道を振り返る」報
告／写真展「天理大学 100 年」を
開催／新刊紹介

巻頭言

不安や不満の処し方

おやさと研究所長 井上昭洋 Akihiro Inoue

天理教では、身上(身体)は親神からの
かりものであり、心だけが自分のもの、すな
わち、心だけは自由に使うこと(心の自由)
が許されていると教えられる。では、その心
とは一体何か。辞書的な定義に従えば、心と
は思考・感情・意志といった人間の精神作用
または精神的活動の総体ということになる。
心がどこにあるかと問われれば、その問い自
体が正しいかどうかはさておき、胸に手を当
てる人もあれば、頭を指さす人もいるだろう。
今日では、心は脳の機能から生まれる現象で
あり、心は脳というハードウェアがあって成
立するソフトウェアのようなものと捉えら
れることが多い。また、認知科学的視点に立
てば、心の働きは、視覚・聴覚といった知覚
から感情や思考に至るまで、外界の情報を受
け取り、処理し、意味づける脳の働き、すな
わち認知機能によって支えられていると言
える。心は認知機能を基盤として生まれる精
神活動の総体ということになる。

人は心を持っているがゆえに、誰も不安
を抱えたり、不満を持ったりして生きていく。
この心理的ストレスをどのように処理するの
かを解明しようとするのが、認知的不協和理
論や自己防衛機能(防衛機制)理論である。
認知的不協和とは、矛盾する2つの認知が同
時に存在することで生じる心理的緊張状態の
ことである。例えば、健康に悪いと知りつつ
喫煙を続ける場合、自分は喫煙しているとい
う自覚(認知①)と喫煙は健康に悪いという
情報(認知②)との間に葛藤(不協和)が生
じる。この場合、人は喫煙をやめることによ
り不協和を解消するか(認知①の変更)、喫
煙者でも長生きの人がいると考えたり、気分
転換になって精神衛生上良いと考えたりする
ことで喫煙行為を正当化して不協和を軽減し
ようとする(認知②の変更)。このように矛
盾する認知(思考や行動)が存在する時に生
じる心理的な不快感とそれを解消するプロセ
スを説明するのが認知的不協和理論である。

一方、自己防衛機能とは、心理的なストレ
スや葛藤から自分を守るために無意識に用い
る心理的メカニズムのことである。例えば、
人に叱られた後に物に当たってしまうのは「置
き換え」という自己防衛機能である。過去の
悲惨な出来事を知らないうちに忘れてしま
うという、受け入れ難い不快な経験を無意
識に抑え込むという「抑圧」という自己防衛
機能になる。原稿の締め切り間際に急に研究
室の掃除を始めるのは、困難な状況やストレ
スから無意識に逃げる「逃避」と呼ばれる自
己防衛機能だ。また、満たされない状況に対
して、もっともらしい理由をつけて正当化し、
自分を納得させるのは「合理化」である。具
体例として紹介されるのが、イソップ童話の
『すっぱい葡萄』だ。空腹の狐が高い木に実
った美味しそうな葡萄を取ろうと何度もジャン
プするが、取ることができずに「どうせあの
葡萄は酸っぱくて美味しくない」と自分に言
い聞かせる話である。だが、キツネが意識的
に現状を正当化していると考えれば、認知的
不協和理論で説明することもできる。

交通事故にあつて腕を折った人に「打ちど
ころが悪ければもっと大きな怪我をするところ
だった」と慰めたり、被災して家を失った
人に「家族全員が無事で良かった」と励まし
たりするのは人の常である。このようにより
大きな災難を想定して慰めるのも「合理化」
と考えることができる。天理教の信者であ
れば、「大難を小難にお連れ通りいただき、あ
りがたい」と得心する状況だ。学生時代、心
理学の講義で認知的不協和理論について学ん
だ時、天理教の「大難は小難に、小難は無難に」
という教えも、所詮心理的ストレス解消のプロ
セスに過ぎないのかと思ったりしたが、こ
の教えの要点は「小難を無難に」にあること
に思いが至らなかったのだった。認知的不協
和の起こらない「無難」の状態であっても親
神の守護を感謝することの大切さに気づいた
のは、少し経ってからのことである。

明治 22 年 8 月

天理大学人文学部講師

深谷 耕治 Koji Fukaya

増野正兵衛は、明治 17 年の初参拝のとき、教祖から「いずれはこの屋敷に来んならんで」とのお言葉を頂き、その後おぢばへの移住を度々促されていた。しかし、当時増野家は神戸元町で洋品店を営んでおり、神戸のような繁華な町から大和の草深いところへの移住にはなかなか決心がつかなかった。「おさしづ」の割書きを見ると、とくに妻の躊躇^{ためら}いが強かったようである。今回は、そうした中での明治 22 年 8 月の「おさしづ」を見ていきたい。

- ・明治 22 年 8 月 7 日（陰暦 7 月 11 日）午前 8 時：増野正兵衛裏向悪しく、左耳鳴り、右鼻瘡頭しんの伺／押して国元だんへ通路せよとの事でありますか伺
- ・8 月 11 日（陰暦 7 月 15 日）：増野正兵衛身上下痢の伺／押して願
- ・8 月 17 日（陰暦 7 月 21 日）：増野喜市の身上心許なく、神様の御守護にて全快致せしや、遠国の処にて案じらるゝに付伺
- ・8 月 19 日：清水与之助身上の願
- ・同日：清水はる熱強く、上へ戻すに付願
- ・8 月 23 日（陰暦 7 月 27 日）：増野正兵衛神戸へ帰宅御許し願／同日同人妻いと儀、大和へ引越すに未だ早いと申します、これは理の論しが足りませんか、私の心が定まりませんか付伺
- ・8 月 24 日：兵神分教会所にて参詣人不思議なる御自由あり、いかなる御知らせなるや、清水与之助、増野正兵衛、中井宗七より伺
- ・8 月 26 日（陰暦 8 月朔日）：増野正兵衛身上障り伺
- ・同日：兵神分教会所講社の人多く泊める事伺

明治 22 年 8 月 7 日、正兵衛は、「裏向（大便）」の調子が悪く、さらに「左耳鳴り」「右鼻瘡頭しん」（右鼻頭のおでき？）の症状があったので伺うと「遠くへ一つへ通路又々通路、何かの事情運んで又々の道という」とあり、さらに「国元に通路（連絡）せよ、とのことか」と伺うと、「さあへ一日早く通路、一つ十分一つの理を知らして早く事情運ぶよう」と諭されている。神戸にいる人たちへの連絡を促されていることが読み取れる。

4 日後の 11 日、今度は下痢の症状で伺うと「何にも身上心に案ぜる事は要らん。一日の日生涯の理が治まる」と諭され、押して伺うと「所を変えて治まるもいんねん一つの理、安心させてくれ」「遠く所は事情言葉々々を以て運ぶへ。十分めんへ何にも案ぜる理は要らん」と述べられている。神戸からおぢばへと住み替えても「いんねん一つの理」で治まることや、神戸という遠い場所にいる者たちにも心配させないように言葉でしっかり伝えるようにと諭されていると解される。

正兵衛の甥である増野喜市（姉まちの息子）は、重度の肺病を患っており、7 月 28 日に「おさしづ」を伺うと、「皆これまでの聞きたる話を伝えて、前生いんねんの事情も伝えてやるよう」と諭されていたが、8 月 17 日に改めてその後御守護を頂いたのかどうか伺っている。「さあへ遠く事情、尋ねる処、幾

重十分一つ治まりある。一つの事情近々一つ便り近々」と、近々御守護頂いた便りが来ることが示されている。

8 月 19 日、清水与之助も身上の患いで伺っている。「朝という、十分晴天」「年々事情いつへまでやない。難しい事やないで」と述べられており、1 年単位で取り掛かるような事柄でも、一日一日の「朝」の迎え方について論されているのではないかと。また、同日、与之助の妻・はるも「熱強く、上へ戻す（嘔吐）」で伺うと、「あたゑいつへまでのあたゑ、皆揃うてあたゑという」と述べられており、周囲の者との間の「遠慮気兼ね」は持たずに、一手一つに通ることの大切さが伝えられていると解される。

8 月 23 日、正兵衛が神戸に戻ることを伺うと「さあへ心に掛かるだけ。身は一日の日、急いて心置き無う運ぶがよい」と諭されている。その際、正兵衛は妻のいとが大和への引越しはまだ早いということについて、「理の論しが足りない」のか、「正兵衛自身の心が定まっていない」のかについても伺っている。「一寸の処深き処、深き心はあれど一寸の理を思う」と、深く思索する中でささいな事に心が囚われてしまうことを述べられた上で、「前々古き一つの理、所々十分の事情話してくれるよう」と、以前から伝えている「古い一つの理」について十分話してくれるようにと諭されている。おそらく、教祖から「いずれはこの屋敷に来んならんで」とのお言葉を頂いたことではないか。そして「それより一つの心を定めて十分許そう」と述べられている。「許す」というのは、なかなか心が定まらない現状に関してだと読み取れる。この日の割書きには具体的な問いかけが記されており、正兵衛の切なる思いが感じられる。

さて、翌日、兵神分教会の参詣人に「不思議なる御自由」があったようである。具体的にどのようなことがあったのかは明らかではないが、親神様からの「いかなる御知らせなるや」を清水与之助、増野正兵衛、中井宗七の 3 名の連名で伺っている。「一つ談示何かの事、案じの事情を以て一つ成らん事情、自由の理がある中に、一つ案じると、みんなで談じ合いながら進めている事柄が成立しないのは、神の自由自在の働きに対する案じ心があるからであると諭された上で、この度の「不思議なる御自由」によって神様のお働きが感じられたなら、「自由何処から見ても一つ鮮やか運んでくれるよう。速やかという理を知らし置こう。」と説かれている。

8 月 26 日、正兵衛が身上の障りで伺うと「内々十分どちらなりとも生涯治め」と、家内の誰彼にも十分に生涯の理を治めるように諭されている。正兵衛たちのおぢばへの伏せ込みが一時的なものではなく、生涯の心定めであることが読み取れる。

同日、兵神分教会の人々を大勢（親里に）宿泊させることについて伺っている。「日々の処出入り、道のため十分の理、日々世界一つの理から世上一つの理」というお言葉から、信仰者以外の人々も含まれていたのではないかと。「どうであろう、それはどうである、全然心に掛からんよう知らせ置く」と、そうした人々が宿泊することについてとやかく言う必要は少しもないと諭されていると解される。どんな人であっても受け入れていく姿勢について説かれているのではないかと。

D.C. グリーンの『Tenrikyō』(6)

おやさと研究所准教授
尾上 貴行 Takayuki Onoue

前回は、グリーン氏の『Tenrikyō; or The Teaching of the Heavenly Reason』(天理教一天の理の教え)の日本語訳を行った中西喜代造氏の翻訳にまつわるエピソードや同論文の所感などを紹介した。今回は、大久保昭教氏がこの論文を取り上げた著書『外国人のみた天理教』(天理教道友社、1973年)で、同氏がどのようにこの論文を評価しているのかについて見ていくことにする。

『外国人のみた天理教』は、大久保氏が『みちのとも』に1970年(昭和45年)1月号から1972年12月号まで合計36回にわたり連載したものをまとめて、1973年に出版したものである。同氏は、異文化圏での布教伝道においては、異なる文化へいかに順応するのかを検討すること、またそのためには異文化圏の人々の考え方や天理教の受け止め方などに関する体系的な視点を蓄積していくことが必要であり、その手がかりの一つとすることが同書執筆の経緯であると述べている。そして、執筆にあたっての問題点として、外国人が書いた天理教に関する文献の中には重要な部分について誤解がみられることがあるが、これはそのつど指摘して修正すべきではないかという点、また文献の執筆者の立場が研究者、外交官、新聞記者、大学院生などさまざまであり、これらを同様にとりあげてその内容を紹介していくのが適当なのかどうかという点などを挙げている。しかし、「偏見と誤解が入り乱れているとしても、わりと情熱的に取り組んでくれている外国人の天理教研究を、ひとまず整理して、一つの見方・考え方として耳を傾けてみる必要があることではないかと結論」づけ、「彼らの文献に述べられた、いくつかの特徴を年代順に取り上げてみようとする意図」(14頁)から、この『外国人のみた天理教』を執筆している。

その主な内容は次のとおりである。まず「原初期の三大研究」としてグリーン、バレー、ハースの研究を取り上げ、続いて明治末期から戦前までの「新しい研究の胎動」としてウオレンとホルトムを取り上げている。そして、終戦後まもなく出されたストラレンの大作を取り上げ、それ以後を「多彩化した天理教」として、ハンマー、トムセン、ブラックウッド、ニューウェルなどの研究を取り上げ、最後に「世界たすけへの道」でまとめとしている。このようななかでグリーン氏の「天理教一天の理の教え」はまさにその最初期の論文として一番目に取り上げられている。

大久保氏は、「グリーンはまず第一に、天理教の発生は独自のものであるという前提をもって本教をとらえた」(25頁)のであり、またグリーン氏は「天理教は『日本国民大衆の宗教状態に深刻な教化を与えただけでなく、その独自の心理現象は日本の信仰生活に実に有力な感化を過去にも現在にも与えている』という前提のもとに筆を進めた」(27頁)としている。また彼の研究姿勢について、「偏見と悪感情におおわれた並みある当時の反天理教文献によっても、いささかも自らの着目点を狂わせていないグリーンの本教への態度は、さすがに海外伝道者として、国際的文化人としての面目躍如たるものがあると申せよう。」(27頁)とその「偏見なき研究態度」(25頁)を評価している。

そして、グリーン論文の内容を紹介しながら、随時所感やコメントを記している。ここでは参考までに、特に筆者の目を引

いたものをいくつか挙げておきたい。

- このグリーン「元はじまりの話」を読んでゆくと、なるほどとよくわかる一つの筋道をたどることができ、非常によく理解できるのは、どうしてであろうか。おそらく、こうした感じを抱かれる方も多いと思うのだが、これは英語という言葉の特殊性からきているのか、グリーンのまとめ方が上手なのかは私自身も判然としないが、何かあるような気がしてならない。(36頁)
- 種々の方途をもって、天理教全体についての考察を展開したグリーンであったが、その最も主要なよりどころとしたのは、やはり本教の文献であったようである。(38頁)
- グリーンは最大の努力を傾けて、この聖典への理解に取り組むのであるが、まず、おふでさきの英文訳を手がけている。(中略) みかぐらうたの場合もそうであるが、この英文への翻訳に当たり、日本文の解釈にそう多くの誤りを犯していない点はさすがであり、その理解力と努力は大変なものがあつたと推察される。(42～43頁)
- 今日全体をよく検討してみると、意味を取り違えた部分もあるが、今ここで、グリーンのこの英語への翻訳の仕方についての価値は問わないこととする。なぜなら、このグリーンに続いて幾人かの外国人が、こうしておふでさきの一部やみかぐらうたの翻訳を手がけたのであり、今日教会本部から出されているものと比較してみることは非常に興味のあることで、ぜひ研究せねばならぬ課題であるが、別な機会に種々な翻訳を考え合わせることにの方が、より意味深いものがあると思うので、…(46頁)
- 真摯な態度で本教に取り組んだグリーンではあったが、広大な本教の教理の淵をさまよいながら、魅力ある清泉にたどりついたその時に、フトわれにかえる旅人のごとく、キリスト教徒の殻の中にもぐりこみ、結局は親神という概念には、たどりつけなかったようである。(56頁)
- キリスト教が日本文化に影響を与え、その日本文化が天理教を育てたことは、結局、キリスト教の影響を天理教も受けているのだという論理を控え目ながらもおし出し、ついには「親神」という思想は理解し難いものである、という結論に達したのであった。(中略) この天理王命が「人類の親」であるという最も肝心な教えの焦点をぼかしたことは、この研究の限界を、はっきり示したと言って過言ではなからう。(63～64頁)

上記からは、外国人であるグリーン氏が天理教の教理や当時の様子についてどのように見聞きし理解していたかをうかがい知ることができる。また、当時の日本社会における天理教への認識がいかなるものであったのかを知る手がかりとなっているとも言える。大久保氏は、「グリーンは、当時としてはなかなかの炯眼けいがんの持主であり、今日なお指摘さるべきいくつかの問題点を提起していることを思うとき、記憶されるべき先駆的研究と呼ぶにふさわしい労作と言ってよいであろう。」(64頁)と述べてこのグリーン論文に関する稿を締めくくっている。この論文はまさに外国人による先駆的研究であり、天理教の伸展期かつ海外伝道の草創期の状況を理解する上にも意義のある論文と言えるであろう。

文物が語る音の世界—月琴と阮咸—

月琴は阮咸の別名

唐代中期に墓から出土した銅製品が、図像に残る晉の阮咸の弾く楽器に似ていたもので、あらためて木製で造って「阮咸」と命名されたことを前回紹介した。唐代晩期になってそれに後日談が付け加えられた。晩唐の李匡文『資暇集』の記述である。

今においても未だ佳号を蒙らず、況んや阮は昔の賢なるものを云い、豈に名氏を以てして楽器を号する可けんや。其の形は月を象り、其の声は琴に合う、目して月琴と為すは宜なるかな。是れ自り之を知る者は、旧名を以て呼ばず（于今未蒙佳号、况阮云昔賢、豈可以名氏而号楽器乎。其形象月、其声合琴、目為月琴宜矣。自是知之者、不以旧名呼）

阮咸という賢者の懼れ多い名よりも、形が月に似て、音色は琴に合うので、「月琴」という名になったという。改名されて、旧名の阮咸と呼ぶものはないとのことだが、実際にはその後も楽器阮咸の名は失われなかった。

北宋（960～1127）には阮咸の楽譜も多数存在していたようである。宋代の慶暦元年（1041）に欧陽脩等によって編まれた『崇文總目』巻一に以下のような楽譜がみえる。

「阮咸調弄」二卷 不著撰人名氏

「阮咸金羽調」一卷 闕

「阮咸譜」二十卷

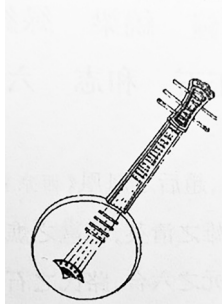
「阮咸曲譜」一卷 闕 不著撰人名氏

『崇文總目』の巻一には、「易」「書」「詩」「礼」「楽」という、儒家的觀念に則した由緒正しきものに関する文献が並べられている。その「楽」においては、文人楽器である七絃琴と阮咸のみ、その専門楽譜が何種類も記載されている。『宋史』にあるように、北宋初期に、太宗が五行思想に基づき四絃を五絃に改造させたこともあり、阮咸が特別な楽器として認識されていたことが窺える。

事典が示す月琴と阮咸の混乱

月琴について、北宋の音楽事典である陳暘『楽書』巻141 楽圖論・俗部には以下のように記載がある。

月琴 五絃、十三柱



月琴は、形は円く項は長く、上に四絃と十三の品柱、豪琴の徽を按じ、絃を転じて律に应ず。晉の阮咸の造りしものなり。唐の太宗は更に一弦を加え、其の弦に名づけて、金・木・水・火・土と曰う。開元中自り編じて雅楽に入れて之を用う（月琴、形円項長、上按四絃、十三品柱、豪琴之徽、転絃应律。晉阮咸造也。唐太宗更加一弦、名其弦曰金・木・水・火・土。自開元中編入雅楽用之）

月琴の解説には四絃としながら、図は五絃であるのは、宋初期の太宗による改良のためであろう。ここには、阮咸の改造は、唐の太宗によるとあるが、阮咸と命名された楽器の出現が唐代中期であり、あきらかに誤りである。記述の論理性からいって、阮咸が晉の制作で、唐の開元期に雅楽に編入されたとするならば、その前に五行に照らした改造がなされるのが筋と考えたのか。権威ある事典も鵜呑みにはできないことがわかる。さらに、『楽書』巻145「楽図論・俗部」に「阮咸琵琶」の解説が別にあげられて、阮咸と月琴についての混迷をさらに深めた。阮咸と月琴はその後どうなったのか。視点を日本に移してみよう。

日本に伝わった月琴

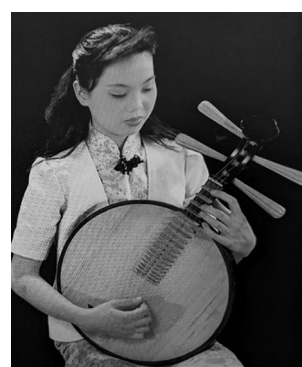
少し前には古道具屋にいくとよく四絃の月琴が置いてあった。それほど江戸から明治にかけて日本でも月琴が流行した。それは、もちろん中国国内での月琴の流行による。中尾友香梨『江戸文人と明清楽』（汲古書院、2010年）は、その由来などを詳述した書である。それによると、まず明代の中期頃から中国では「小曲」「小調」「小唱」「時曲」「時興雜牌新曲」「雜曲」「時調小曲」などと呼ばれる新しい韻文形式の音楽が各地で盛んに行われた。それは文人たちの伝統的な詞曲よりは卑俗で、農村の民謡よりは洗練された、いわば新興市民階級による通俗的な音楽であった（148頁）。中尾氏によると、それが日本に入ってくると、上品な「月琴音楽」と卑猥な「唐人踊」という2つの異なる形式となって定着し、『月琴音楽』は、月琴の音色と華音の歌を楽しむことをメインとし、長崎遊学の文人騷客によって三都およびその他の地域へと広められ、教養人の間で広く学ばれた。後に『清楽』として定着した（173頁）とされる。

その稽古は、右図（前掲『江戸文人と明清楽』9頁）のように、集まってなされたようだ。また、田辺尚雄『明治音楽物語』（青蛙房、1965年）の「九連環とカンカン踊」に、明治に流行していた明清楽、とりわけ清楽について、「その歌詞はすべて中国音（清音）を以て謡う。主要な楽器は月琴、琵琶、阮咸、胡琴（胡弓）、横笛（清笛）、三絃（蛇皮線）、木琴、太鼓などである。中でも月琴はもっとも広く行われ……」と、月琴の普及が後のピアノの流行のようだったとある（63頁）。この記述によっても、阮咸と月琴は別楽器だと明確にわかる。なかでも四絃の月琴は、誰でも簡単に弾けて持ち運びにも便利で、人気を博したのであろうと考えられる。



月琴は阮咸とは異なる楽器

現代の中国音楽を見てみると、月琴（写真『中国楽器図鑑』山東教育出版社、1992年、214頁）はやはり阮咸とは異なる楽器とされている。劉文榮『古今同名楽器考』（上海音楽出版社、2023年、49頁）によると、月琴は頸が短くて、共鳴板を内包する胴部が大きい作りであるが、阮咸は頸が細くて長く、胴部が月琴より小さいとある。



その扱いやすさからか、月琴は京劇の伴奏楽器としても必須のものであるだけでなく、錫劇・漢劇・桂劇、台湾歌仔戲など地方劇にも用いられた。さらには、少数民族の彝族も月琴を用い、「絃子」と呼ばれた。演奏時には（4本のうち2本の絃は同音で）結局2本の絃を操るので、演奏方法も簡単であり、複雑なリズム変化は少ない（薛宗明『中国音楽史』楽器篇（下）台湾商務印書館、1983年、767頁）という。

そういえば、阮咸が月琴と呼ばれるようになった由来として冒頭に紹介した『資暇集』は、作者名も李匡文か李匡父かはっきりとせず、世俗の談義をあれやこれや取り上げた書だった。実は、つとに晩唐から俗楽器の「月琴」は、文人楽器の「阮咸」とは別の道を歩み始めたのかもしれない。

アメリカ南部人移民の植民地経験③

おやさと研究所講師
中西 光一 Mitsukazu Nakanishi

ノリス植民地

これまでの植民地経験を振り返ると、同胞間の対立や折衝、土地をめぐる問題などにより、ヴァーレ・ド・リベイラ地方における南部人の植民地戦略は、不運にも失敗に終わった。そして、そのような苦境から脱するために、故郷へのノスタルジアから帰国した者もいれば、新たなスタートを切るべく別の植民地へと向かった者もいた。その際、特に人気のあった行き先が、ヴァーレ・ド・リベイラから北へ約 200 キロメートルの場所に築かれたノリス植民地（以下、ノリスと略す）であった。以前（本誌 2 月号）にも述べたように、ノリスは最も繁栄した植民地であり、当地をブラジルにおける南部文化の揺籃と位置づける歴史家や研究者も少なくない。それでは、ノリスの成功を決定づけた要因とは何であろうか。これまで見てきた植民地と、何が異なっていたのか。これらの点について詳しく見ていくことにしよう。

まず、ノリスを築いたウィリアム・ノリスとその息子ロバートについて紹介しよう。南北戦争以前の南部人の生活史を分析したセリオ・シルバによると、ノリス家はもともと、19 世紀前半の南部社会で一世を風靡した「アラバマ・フィーバー」という移住ブームに乗じて、ジョージア州からアラバマ州へ移住した開拓民であった。彼らは綿花、ジャガイモ、エンドウマメ、トウモロコシなどを栽培し、牛や羊、豚などの家畜を飼育しており、戦争前夜には 360 エーカーの土地と 36 人の奴隷を所有していた。なお、ウィリアムはプランター（大規模農園の経営者）であっただけでなく、弁護士や政治家としても活躍していた。彼は 1839 年から 1845 年にかけて、アメリカ連邦議会においてアラバマ州選出の上院議員および下院議員を歴任した。しかし、南軍の敗北により、彼は築き上げた財産や社会的地位、奴隷を全て失い、その後、1865 年 12 月にロバートと共に「ブラジリアン・フィーバー」の潮流に乗ってブラジルへ渡った。彼らはサンパウロ州のサンタバルバラ・ド・オエステに定住し、そこでノリスを築いて成功を収めたのである。

ノリスの成功の根幹にあったのは、農業であった。ノリス家は、南部人としての文化的共同性を維持しつつ、ホスト社会との齟齬や一線を画す姿勢を一切示さなかった。むしろ、彼らは積極的にブラジル人との関係構築を目指し、後者に対して南部流の農業技術を伝授したり、アメリカ製の農耕用具を提供したりしていた。とりわけ、ウィリアムはニコラウ・ジョゼ・デ・カンポス・ヴェルゲイロという裕福なプランターに綿花栽培の技術を伝授し、ヴェルゲイロはこれにより国内屈指の綿花生産者となった。実際、このウィリアムの姿勢は、南部流のプランテーション経営をホスト社会に適應させ、過去の繁栄を回復しようとする試みであったと考えられている。また、南部人は、ブラジルの農耕用具の質や土地の地質など、現地の自然条件を十分に意識していたとも言われている。

ノリスにおける南部人の経済活動に着目したジョゼ・リオスによれば、南部人たちは、ブラジルの農業技術がアメリカ南部と比べて著しく遅れていることに衝撃を受けたという。というのも、19 世紀後半の当時のブラジルでは、依然として 18 世紀の植民地時代の技術水準のままであり、開墾は進まず、土地も

期待されたほど肥沃ではなかった。さらに、鋤の代わりに鋤のみで耕作が行われていたことも彼らにとって驚きであった。こうした状況に対応するため、南部人たちはアメリカ製の鋤や農作業用の衣類など、さまざまな道具をブラジルに輸入した。実際、テキサス州出身のヘンリー・スティーガルはノリスで初めてアメリカ製の鋤を導入し、1880 年代初頭には、周辺に定住していたイタリア系移民とともに鋤の製造工場を設立した。このような農業の成功は大きな反響を呼び、その報せは瞬く間に他の植民地に暮らす南部人たちの間に広まり、困窮していた多くの人々がノリスへと移り住むこととなった。

農業以外では、学校の設立も南部人の定住を促進した重要な要素であった。学校は、南部人の子弟が母語教育および基礎教育を受ける場であると同時に、“南部人”または“アメリカ人”としてのアイデンティティを確立する役割も果たしていた。南部人たちは順に「コレジオ・インターナショナル」（1869 年）、「コレジオ・マッケンジー」（1870 年）、「コレジオ・ピラシカバーノ」（1881 年）などの学校を設立し、多くの移民 2 世・3 世がこれらの学校に通った。20 世紀初頭には、これらの学校は南部人以外のブラジル人の子弟の受け入れも開始し、“諸文化の平等”という、多様な文化を尊重する教育方針を掲げ、当時としてはきわめて進歩的な教育を実施していた。

このように、ノリスのケースでは、農業活動と学校の設立が南部人の定住およびブラジル社会への同化を促進した。無論、そこにはノリス家の存在が重要な役割を果たしていたが、他の南部人たちもブラジル社会において独自の人的ネットワークを形成し、農業や製造業を通じて地域産業の発展に寄与したのである。彼らがヴァーレ・ド・リベイラの南部人と比べて、より効果的な植民地戦略を展開し得た決定的な要因は、後者が農業の失敗や同胞間の対立に苦しんだのに対し、前者はあらゆる逆境に立ち向かい、それらの否定的要素を肯定的なものへと転換できた点にあった。さらに、南部とブラジルとの文化的差異を前提としつつも、ノリスの南部人は、そのギャップを埋めるような社会関係の構築に成功したのである。

今日、サンタバルバラ・ド・オエステには「アメリカーナ」という都市が隣接している。その名の通り、南部人を冠した都市名であり、現在も多くの子孫がそこに住んでいる。毎年 4 月には、南部人を讃える目的で「アメリカ人の祭り（Festa dos Americanos）」が開催されており、女性は南部の伝統衣装に身を包み、男性は南部連合の軍服を着用してカップルで踊るのが祭りの目玉行事となっている。この祭りでは、南北戦争や植民地の歴史が今も多くの人々に語り継がれている。

[参考文献]

- Célio Antônio A. Silva. *Capitalismo e escravidão: a imigração Con-federada para o Brasil*. Tese (Doutorado em Desenvolvimento Econômico) – Instituto de Economia, Universidade Estadual de Campinas, Campinas, 2011.
- José Arthur Rios. “Assimilation of Emigrants from the Old South in Brazil”, *Social Forces*. 26 (2), 1947, 145-152.
- Leticia Aguiar. *Imigrantes Norte-Americanos no Brasil: Mito e Realidade, o Canto de Santa Bárbara*. Dissertação (Mestrado em Ciências Econômicas) – Instituto de Economia, Unicamp, Campinas, 2009.

ニューヨークの桜

天理教ニューヨークセンター所長

福井 陽一 Yoichi Fukui

春、ニューヨークの街を散歩していると、市内のあちこちで桜の花を楽しめる。意外に思われるかもしれないが、街路樹で八重桜が人気だったり、一軒家やタウンハウスの庭に八重桜や枝垂れ桜を植えている家が増え、ここ 10 年から 20 年の間に、ニューヨークの人々の間にも、「桜の花を愛でて春を楽しむ」習慣がかなり広まってきているように思われる。近くの校庭には早咲きの桜が咲き、ニューヨークセンターの庭には、ソメイヨシノと八重桜が、春の訪れを知らせてくれる。

ニューヨークの桜は、1912 年、両国の友好関係を祝うため東京市からワシントン DC とニューヨーク市に贈られたのが最初と言われている。ハドソン河畔の公園に最初に植樹されたこの地域は現在「さくらパーク」と呼ばれている。ニューヨークは東京よりかなり北に位置している（青森市と同じぐらいの緯度）ため、例年は東京より 2～3 週間遅れてピークを迎える。毎年 4 月から 5 月にかけて、各地で毎週末のように桜祭りが開催されている。

今年は、ニューヨークセンターがあるクィーンズ区のフラッシング・メドウ・コロナパークで開催された桜祭りに、天理教ニューヨーク少年会の鼓笛隊が久しぶりに出演した。この公園は 1964 年に開催されたニューヨーク万博の会場跡地で、数々の映画に登場する巨大な地球儀のモニュメントや、野球の MLB ニューヨーク・メッツの球場、テニスの US オープンのスタジアムなどがある有名で広大な公園だ。万博が開催された当時、ニューヨーク布教に携わっていた吉田進氏が日本館の起工式でお祓いを行った地でもある。ニューヨーク日系人会が毎年数本ずつ桜の木を寄贈して植樹されており、クィーンズ区の新しい桜の名所になってきている。その日系人会が主催する 20 周年記念の桜祭りだった。

少年会による演奏は、「ミッキーマウスマーチ」「上を向いて歩こう」「スウィート・キャロライン」の 3 曲で、在ニューヨーク総領事館の大使はじめ、来場の多くの方々から好評を博した。少年会の鼓笛隊は、ここ数年間、多くの隊員が少年会を卒業し隊員が急に低年齢化した為、対外的な演奏は休止していた。しかし、地道に練習を続けながら、今回の演奏が実現した。熱心に指導を続けたスタッフの皆さんや保護者の皆さんの努力の賜物だ。

その翌週には、ブルックリン植物園での桜祭りに、ニューヨーク天理雅楽会が雅楽の演奏を行った。ブルックリン植物園の桜祭りは、ニューヨーク市近郊では最大の桜祭りで、毎年 6 万人を超える来場者が訪問する。この植物園は 1910 年に開園し、敷地内に日本庭園や桜の小道・遊歩道があり、アメリカで一般公開された最初の日本庭園とされている。その日本庭園での雅楽の調べは桜を愛でる人々の心を癒したに違いないだろう。ニューヨーク天理雅楽会は、しばらくの間、活動を休止していたが、若い人たちの熱意から再開され、毎月地道な練習が重ねられていた。今回の演奏は、再結成してから初めての公共の場での演奏となった。古典の「越天楽」「五常楽」をはじめ、「さくらさくら」「ふるさと」



桜祭りでの鼓笛の演奏を終えて

「君が代」などが演奏された。

今年の春は、音楽を通してニューヨークの人々と交流し、地域の活動に貢献しながら、天理を知ってもらいたい良い機会に恵まれた。これからもこのような交流を続けていけるように努めていきたい。

天理教スリーデーコース

ニューヨークセンターの桜が咲き始めた 3 月末に、天理教スリーデーコースがセンターで開催され、5 名が受講した。3 日間にわたり、受講生と講師、スタッフが寝食を共にしながら、天理教の基本的な教えを学び、講義、ねりあい、おつとめ練習、ひのきしん活動、グループワークなどが行われた。共に活動し、助け合うことで、より深い親睦も深められる。このコースは毎年春に実施されているが、修了生には、次のステップとして、夏にアメリカ伝道庁で開催されるアメリカ修養会の受講が勧められる。これらの教化育成コースは、アメリカ伝道庁が開発し、初めての人の 90 分で天理教を紹介する「ジョイワークショップ」、3 日間の「スリーデーコース」、1 カ月間の「アメリカ修養会」があり、段階的に教理を学べるように用意されている。

スロベニア布教所 20 周年

今年の春に嬉しい出来事がもう 1 つあった。ニューヨーク天理文化協会を通じて天理教を知り、入信したバーリック・ジュサン氏が布教所を開設して 20 年を迎え、20 周年記念祭が行われた。バーリック氏は、ニューヨークに約 10 年間滞在し、その間に文化協会で日本語を学び、センターの月次祭やアメリカ伝道庁の修養会を受講した。自国のスロベニアに帰国し、数年後にスロベニア布教所を開設した。スロベニアは、ヨーロッパのほぼ中央部に位置する、自然豊かな小さな国で、かつてはユーゴスラビアに属していた。アルプス山脈とアドリア海に接している。スロベニアに住む人々の大多数は、ローマ・カトリック教を信仰しており、人々の生活に大きな影響を及ぼしている。そんな中、細々ながら信仰を続けて、この度 20 年を迎えた。私は記念祭に参拝しながら、これからのスロベニアの新しい道の動きを感じ、喜びを共にした。

2024 年度「教学と現代」(2025 年 3 月 27 日)

『天理教台湾伝道史』刊行記念 台湾伝道を振り返る」

天理総合人間学研究室、天理ジェンダー女性学研究室、伝道史料室(第9回伝道フォーラム)、そして天理教台湾伝道史編集委員会との共催により、3月27日、2024年度「教学と現代」として標記の特別講座が開催された。

天理教の台湾伝道の歴史は、戦前は日本統治時代、戦後は中華民国時代と、大きな政治体制の変化と激動の時代状況の中をくぐり抜け、今日に至っている。昨年(2024年)11月17日には、台湾伝道庁創立90周年記念祭が盛大に執行された。天理教の海外伝道として最も長い歴史をもつ台湾伝道史においては、先人たちのさまざまな苦労があった。その一端について広く紹介すべく、2月26日に刊行された『天理教台湾伝道史』(編集・発行:天理教台湾伝道史編集委員会)の編集委員5名により、それぞれ発表が行われた。

第1講「伝道史の編集の経緯」(金子昭・研究員)では、橋本武徳12代台湾伝道庁長の時代に遡る編集前史から始まり、2013年11月におやさと研究所で第1回編集会議が行われて以来、コロナ禍の困難な時期をはさんで10年以上に及んだ『天理教台湾伝道史』編集の経緯について報告された。

第2講「戦前の台湾伝道史」(山西弘朗・香川大学非常勤講師)では、戦前の天理教台湾伝道が植民地における布教伝道であったこと、「おさしづ」の伺いにより山名大教会が組織的伝道を行ったことなどについて報告が行われた。山西氏は、戦前においては布教対象が内地人(日本本土出身者)と本島人(台湾の現地人)とに分かれる傾向があり、戦後日本人引き揚げ後も存続できた嘉義東門教会などは本島人布教に力を入れていたことを指摘した。

第3講「戦後の台湾伝道史」(高佳芳・元天理教海外部翻訳課員)では、第2次世界大戦の終戦により日本人が引き揚げ、台湾伝道庁はじめ多くの教会が接收されたこと、また戦後の中華民国政府により戒厳令が敷かれ、伝道史において空白の時期でもあった当時の苦難に満ちた状況について報告が行われた。高氏は、台湾伝道庁跡地の戦後接收後の権利譲渡について土地謄本の調査を元にして説明し、また近年、有数の木造日本建築として現存する嘉義東門教会神殿が嘉義市の「市定旧跡」に指定されたことなどを紹介した。

第4講「天理教婦人会の伝道」(堀内みどり・研究所主任)では、1896年(明治29)、古谷マツ姉から始まった女性布教師たちの台湾伝道の状況、また女性の海外伝道者の育成を後押しした天理教婦人会の事業について報告された。報告の中では、中山たまへ婦人会初代会長が1930年(昭和5)6月に台湾を巡教されたことが大きな契機になって、その翌年には天理教婦人会が布教師を台湾に派遣するに至り、川口ハル姉が臺婦講(戦後、臺北臺婦分教会として復興)の中心となった過程について紹介した。

第5講「台湾伝道史の一齣 中西牛^{うしお}郎と高見庄蔵」(佐藤浩司・天理大学名誉教授)では、知られざる台湾伝道史の一側面として、海外伝道を志した船場大教会布教師の高見

庄蔵が天理教校の恩師だった中西牛^{うしお}郎(1859～1930)を慕って台湾に渡航したエピソードについて報告が行われた。中西牛郎はもとは宗教学者・仏教学者であったが、後に「明治教典」の編述にも従事、自らも天理教に入信した。天理教校講師を勤めた後に台湾に渡り、総督府の嘱託として活躍した。高見庄蔵は台北の中西牛郎宅に書生として住み込み、その薫陶を受けた。彼は帰国後、1910年(明治43)ロンドン布教に出発したのである。

以上5名の発表の後、フロアを交えて自由な質疑応答が行われた。最後に、三濱善朗編集委員会代表が挨拶を行い、自らの台湾伝道の経験を振り返りつつ、現時点で到達できた最善の成果が『天理教台湾伝道史』であると語り、力強く締めくくった。(金子昭記)



講師(伝道史編集委員)を囲んで

写真展「天理大学 100 年」を開催

おやさと研究所では、天理大学同窓会(ふるさと会)が所蔵している写真パネルをメインとした標記写真展を、同会および天理大学年史編纂室の協力をえて開催した。南右第二棟1階ロビーの展示スペースを会場とし、5月1日から7日(最終日は13時まで)まで展示し、期間中に133名が来場した。今回は第1期で、秋には、第2期:9月13日(土)～28日(日)での開催を予定している。

今回は、主に天理外国語大学設立時からの建物の変遷、キャンパスの変化、学生生活(学生寮や大学祭など)、町の様子など、大正末期から平成20年までの写真を展示した。

また、本年4月23日に創立100周年を迎えた本学における100周年記念の各種行事の報告や行事予定、各学部などの活動についてのポスターを展示し、現在の天理大学の様子を知ってもらえるようなコーナーを設けた。

第2期では、一部の写真パネルを入れ替え、より興味深い展示にしたいと考えています。卒業生の方々をはじめ、多くの方の来場をお待ちします。(堀内記)

新刊紹介

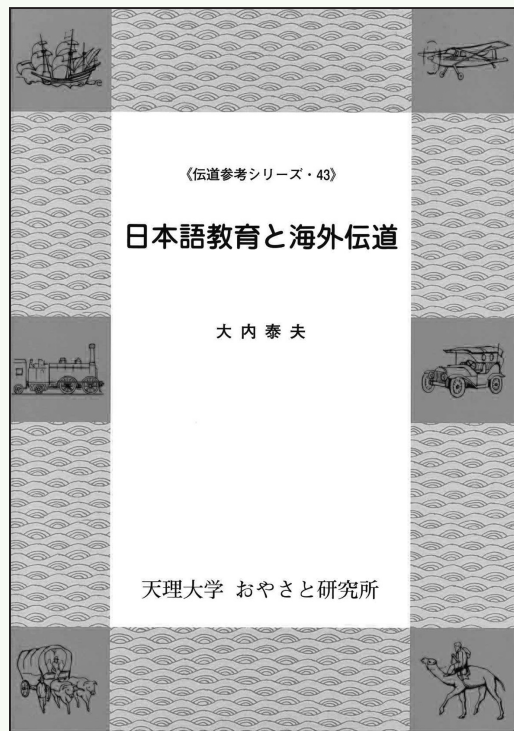
おやさと研究所では、『おやさと研究所年報』第31号、『Tenri Journal of Religion』No.53、大内泰夫著『日本語教育と海外伝道』（伝道参考シリーズ43）を発行しました。

内容の詳細に関しては研究所のホームページ(<https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>)をご覧ください。

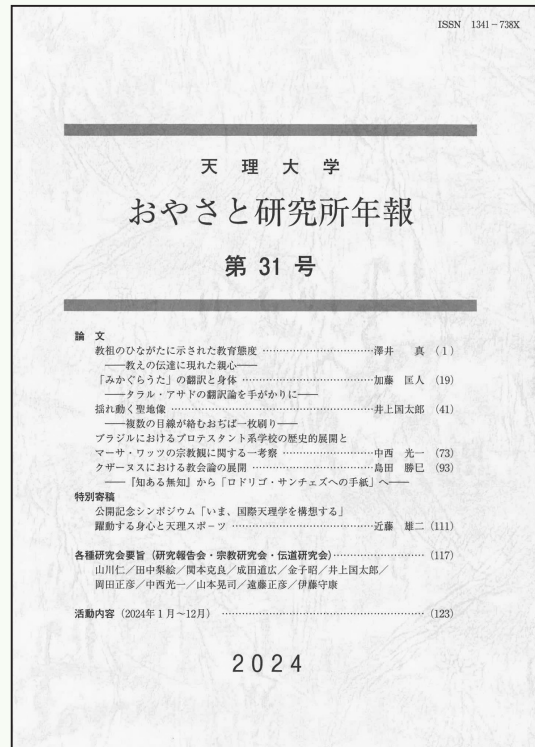
伝道参考シリーズは、道友社販売所で購入いただけます。『Tenri Journal of Religion』（ウェブ版）および『おやさと研究所年報』は、研究所ホームページ、天理大学リポジトリよりご覧いただけます。

出版物については、メール（oyaken@sta.tenri-u.ac.jp）にてお問い合わせください。

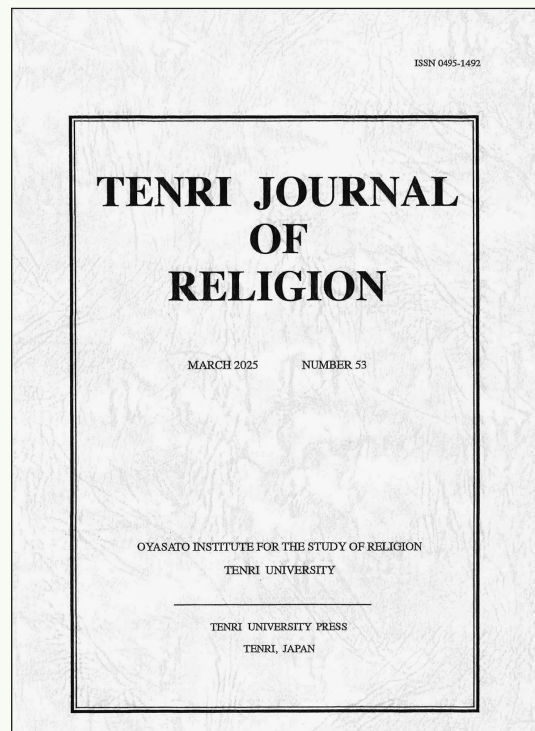
『日本語教育と海外伝道』
（伝道参考シリーズ43）（本体880円）



『おやさと研究所年報』第31号



『Tenri Journal of Religion』No.53



グローバル天理
第26巻 第6号（通巻306号）

2025年（令和7年）6月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 井上昭洋
編集発行 天理大学 おやさと研究所
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050
TEL 0743-63-9080
FAX 0743-63-7255
URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>
E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

おやさと研究所（HP）



印刷 天理時報社
Printed in Japan